

世界農業遺産国際スタディ・プログラム 研修レポート
総論

まずは震災による深刻なインフラや生態系への被害を強く感じた視察だった。能登で育った私にとっては、慣れ親しんだ場所の多くを失いかけたように感じてしまうことが多かった。千枚田の棚田が均平でなくなってしまったことや、町野川河口が隆起により100メートルほど遠ざかってしまったことなどの「土地の変状」、奥能登塩田村の製塩施設やノトハハソの炭焼き釜といった「設備の倒壊」、そして能登でベラがとれないといった「生態系の変化」の3点の被害が特にひどかったように感じる。

今回の能登視察を通じて、やはり人手不足という課題を多く耳にした。特に「経験者」で「長期的」な人材の人手不足である。元々の人手不足や後継者問題が震災により加速している。復旧や伝統の維持に必要なのは即戦力となる経験者だという一方で、ボランティアなどで集まるのは初心者が多くなってしまおうというニーズのギャップがある。

それに付随するが、伝統技術や文化継承の困難さという大きな壁にもぶつかっている。長い年月を要する職人技や地域コミュニティに根差した文化が帰路に立たされているのだ。塩田や炭焼きといった職人技は、AIやデータによる代替が非常に難しく、技術継承自体が課題となっている。また、祭りの継承もいかに準備段階から長期間にわたって人を取り込むのかという懸念点がある。人手不足も当然あるが、そもそも地域に住む人々の生活様式が変化していく中で、どれだけ伝統文化を残せるかも問題であり、観光資源化などで対応している現状だが、より長期的な解決策が必要と言える。

しかし、それに対して新規参入、移住への高い壁も多くある。インフラを中心とした震災の被害は未だ完全に復旧したとは言い難く、そこに移住者を呼べるのかどうかには疑問もある。また、地域コミュニティに対する新規参入に関しても、一朝一夕では難しいものであると考えられる。

こういった課題をこの視察を通して実感した。食文化や祭りなど単に観光資源としての魅力だけでなく、そこに根付いた長期的な人生の魅力や価値をいかにして発信し、人を呼び込めるかが大きな課題となってくるだろう。地震によって人口減少や高齢化が大幅に進んだ能登は、ある種の日本の地方社会の今後のモデルになるとも言える。つまり、こういった能登の課題を解決することは、今後の日本に大きく影響を与えるだろう。